

出版を通しての出会い

原田 奈翁雄さん

「人間として」を共通の土台に、人々が出会い、共に考えたい、という季刊誌「いま、人間として」が昨年末、発行された。これは、径(こみき)書房代表、原田奈翁雄(なのお)さんなど、かつて雑誌「展望」や「人間として」「終末から」(いずれも筑摩書

わが人生の「師」
東京・神田の書店街の西端にあるビル二階の径書房編集部に、原田さんは昔のセーターにジーンズのラフな服装で、こやかに。

「深い期待と共感を抱いて支えてくれた読者を裏切る」と言っていた。しかし、一方で、よきまあとてま、という感慨があります」

七年前の夏、二十六年余にわたって編集者生活を送っていた原田さんが倒産。そのとき、もう二度と出版は手ごまき、と思った。本屋の店先を避るのささうとましかった。倒産後、初めて買った本は、もうかるニューシリーズ「カレーライス」。カレー食事も開くつもりだったが、「それは敗北です。私の著作集は、あなたにやっ

人生宗教

銀行口座を教える」と電話してきた。運賃金を振り込んでくれた。思いあきらめ、山代さんの本を出すと、読者から熱い感想がどとど寄せられた。そこには、つたう、あなたを百身をかたない字でも、自分の言葉を振りかざり、自分の心を通わせるよう

地道な生の輝き強調 困難を共に 共感がこだま

——大いなる残照 季刊誌「いま、人間として」



人との「出会い」が大切ですねと語る原田奈翁雄さん

多ことよって、私もまた救済されるのです。たかさんの人びとが救われ、支えられることと訴えた。各地に読者の会ができ、径書房の本を頒布、拡大するボランティア活動も生まれ、出版社「取次店」書店という出版機構とは異なる「市民運動」としての出版事業が繰り返され、五十八年四月、読者が資金を築いて「読者から読者へ」という前代未聞の書籍広告が新聞を飾ったこともある。

「日常生活を基盤に」
その体験をもとに出版業を設立した。たかさんには及ぶ。すがすがしい終刊
「終刊の理由は単純で、財政能力が限界ぎりぎりになり、

原田の編集長を務め、良心的で深いメッセージを込めた本を出し続けてきた出版人だ。「いま、人間として」という思いを抱き続けるのは、困難な時代なのか。原田さんの「人間」にかける思いを聞いた。
(池田 知隆記者)

「いま、人間として」の刊行を終えるにあたり、原田さんは、終刊号(第十巻)の編集後記を、次のように記した。『ささげまじり、いけれど、木の葉の散りつくした冬の朝、空の光が、深の心とこぼれ、白五万円の欠損を抱